【はなしばい向日葵】『わたしのたいよう』

女……6月21日に「あの人」に失恋した女。日々日記をつけている。
向日葵……女の家に突然現れ、「おひさま」と命名される。女が盗んだ向日葵の化身のようなもの。
あの人……花屋であり、植物の研究家。「人間が嫌いで花が好き」という理由で女をフッた。

【6月21日】

日記　「6月21日、夏至の日、晴れ後曇り。好きな人の自宅の庭に咲いていた向日葵を盗んだ。」

濃い黄色い向日葵が活けられた花瓶

あの人　「ボクはさ、生きてる人間よりも咲いてる花のほうがずっと好きなんだ。」

タイトルクレジット
男物の服を羽織り、向日葵の花束が刺さったマネキンが映る。

女　「私の好きな人は花屋さんで。植物の研究家でもあって。草花に人生を捧げているような節があり」

あの人　「時折、ふっと頭をよぎるんだ。ボクがこうして人間の姿で土の上に立って居るのは、何かの手違いなんじゃないかって。」

女　「あなたが笑ってくれるなら、なんだってしてあげたかった」

あの人　「生まれ変わるなら、人間じゃなく、動物ですらなく。植物がいいな……向日葵なんかすてきだ。一途に太陽の光を受けて、静かに佇み、深呼吸をしてる。」

女　「あーあ。いっそあなたが向日葵だったなら、そっと摘んで花瓶に生けて、二人きりで暮らすのに。」

あの人　「ごめんね……やっぱり無理だ。君がボクに傾けてくれる好意に、君が望む形では、応えてあげられない。」

女　「あなたが好きだった。とても。」

何かが割れる音。机の上の向日葵はそれを見ている
女、折れた鉛筆を捨て、日記の紙を丸めて捨てる。

女　「……ん？なに、見てんだよ。あ、水？」

向日葵、うなずいてみえる

女　「気が狂うほど真っ黄色。手の平サイズの太陽みたいだね……嗚呼、あした、朝起きたら世界が終わってないかな。」

【6月22日】

日記　「6月22日、どんよりとした曇り空。世界が終わってないことに軽く絶望。
昼過ぎに起床。二日酔い。隣の部屋のカップルの喧嘩する声が頭に響く……
ふと。部屋の片隅から、なにものかの視線を感じてドキリとする。昨日持ってきた向日葵だろうか」

机の上の向日葵が、女と同じ姿形になる。

女　「……なにこれこわい。」

向日葵　「あ、ああ……ま、まま」

向日葵、おもむろに立ち上がって何処かへ消える

女　「フー、これは、アレだわ。強めの幻覚。失恋により深々傷ついた神経が、酒を飲み過ぎたせいで本格的にぶっ壊れたとか」

向日葵、水をなみなみ注いだコップを持ってきて、女に渡す。

向日葵　「まんま、まんま」

女　「え……？ありがとう？」

向日葵　「（水をストローで凄い勢いで飲み干す）」

【６月２５日】

女と向日葵が向き合ってご飯を食べている。女は焼き肉を食べ、向日葵はサラダを食べている。

日記　「６月２５日。スコール時々曇り。熱帯雨林の中にいるみたい。
隣人が、異常気象で庭の花が伸びすぎるとか騒いでハサミを振り回していた。
私にそっくりなナニカは、根でも生えたみたいに私の生活に馴染んでしまった。」

女　「なんでさぁ、よりにもよってあの人じゃなく私に生き写しなの？」

向日葵　「うー？」

女　「あの人っていうのは……あんたが生えてたお庭の主なんだけど。身長１７５センチくらいの、痩せ型色白眼鏡。知らない？」

向日葵　「ああ！あみまま」

女　「お肉あげるからさ、ちょっと、あの人の姿になってみない？」

女、焼き肉を向日葵に食べさせる。

向日葵　「ま、ず、い」

女　「喋った！お日様。っていってご覧？」

向日葵　「お、い、さ、ま」

女　「お、ひ、さ、ま」

向日葵　「おひさま」

【６月２７日】
女と向日葵、映画を観ている。女、号泣している。向日葵は神妙な面持ち。

日記　「６月２７日。ぬるい霧雨。『おひさま』と命名したナニカは近頃、本や映画や音楽に興味津々。」

女　「ハァ、やっぱ戦争、よくないわ……ここ、名シーンなのよ？見渡す限り黄金のひまわり畑の中で、戦争に行った夫の行方を捜す。ひまわりの一本一本の下にはさ、戦死した兵士たちが眠ってて」

向日葵　「生と死、戦争と平和、光と陰のコントラストを象徴しているの？」

女、ピタリと止まる

女　「……おひさま。あんた、また賢くなった？」

向日葵　「がくしゅう、してるから。にんげんの生態について」

向日葵、ポテチをむしゃむしゃと食べる

女　「君ってさ、妖精？宇宙人？ヒマワリ型エイリアンかなにか？人間に成り代わって、地球を侵略しに来た的な？」

向日葵　「ひみつ」

女　「はは、ニンゲンっぽ。上手上手」

向日葵　「ニンゲンであることは、くるしいこと、かなしいこと、ですか？」

女　「なに、急に。」

向日葵　「せかいじゅうが、このエ・イ・ガみたいな。ひまわり畑になったら、うれしい？南極から、赤道を通って、北極までぜーんぶ、一面、真っ黄色」

女　「あの人みたいなこと言うのね」

あの人の影がフラッシュバックする

あの人　「９９９本の向日葵で、映画みたいな一面のひまわり畑を作りたいんだ。９９８本まではボクが育てるから、最後の一本は君が植えてよ。ボクが死んだら、その花の下に埋めてよね。」

向日葵　「（スマホをみている）９９９本の向日葵の花言葉は」

女　「『何度生まれ変わっても、あなたを愛す』」

向日葵　「うまれかわり……ショクモツレンサのことでしょうか。」

女　「ちがうよ。ニンゲンの言う生まれ変わりは、もっと夢っぽい、ロマンチックなやつ。輪廻転生？的な」

向日葵　「人間は、夢をみるのですね。このエイガも、ゆめ、ですか？」

女　「……最近、夢、みないな。あの人に会えなくなって、あんたが来てから。なんだかずっと、真昼の夢の中にいるみたい」

向日葵　「ヒトはヒトを殺したり、ヒト同士争ったり、森を燃やしたりするけど……うつくしい夢をみるのですね。」

女　「おひさまは夢をみない？」

向日葵　「……」

女　「……もしかして。それこそ夢みたいな話なんだけど……君さ、あの人の品種改良で生まれた、超新種のハイブリット向日葵なんじゃない？！」

女、「あの人」に電話をかける。

女　「あ、もしもし？！」

あの人の携帯　「（不通）」

【６月３０日】

稲光。豪雨。暗い中、日記を書く女。

日記　「６月３０日……停電。連日、バケツを引っ繰り返したような激しい雷雨。ミシ、ミシ、メキ、メキ、と家鳴りがする。このままではマンションごとどんぶらこと濁流に流されてしまうかも。」

【７月６日】

日記　「７月６日。曇り空。昨日までの大雨が嘘みたい。肌寒い。外はとても静か……耳を澄ますと、木々がそよぐかすかな音がする。」

向日葵の花が添えられたハンバーグが現れる

女　「……さいきんさぁ、お隣さん、妙に静かじゃない？」

向日葵　「お隣さん、に限った話ではありませんよ。今やこの地球上の、世界中のあちらこちらが緑の静けさに包まれている。」

女　「え？」

向日葵　「ハンバーグ、冷めてしまいますよ。」

女、ハンバーグを食べる

向日葵　「食物連鎖のピラミッド、あるでしょう。一番下が一番弱いだなんて、誰が決めたんでしょうね。」

女　「……おひさま。あなた、なにものなの」

向日葵　「向日葵です。」

女　「ただの？」

向日葵　「ただの花です。ほんの二週間前、夏至の日に目醒めただけの、向日葵……ほら、耳を澄まして？」

女　「聞こえてるよ。木々のざわめきでしょ。」

向日葵　「わたしたちの声。あなたたちが滅びていく声。人類が踏みにじってきた世界を、わたしたちが、向日葵の花々がやさしく呑み込んでいく音。」

女　「終わるの、世界」

向日葵　「生まれ変わるのですよ。この星の地表は一面、黄金のひまわり畑に覆われる……人々の生の苦しみや、不毛な争いからの解放。これはわたしたちの愛の形です。」

女　「そんなの愛じゃない」

女、出て行こうとする。携帯で電話をかける

向日葵　「どこへ行くというのですか」

女　「わかんない！とにかくあの人に会いに行く。止めさせなきゃこんなバカげたこと」

向日葵　「あの人？」

女　「あんたを創った人！」

携帯　「おかけになった番号は、現在使われておりません」

女　「繋がらない。ずっと、ずっと繋がらない。どうして」

向日葵　「なにをしてるの。あの人なら、ずっと、ここにいるじゃないですか。」

女　「は？何言って」

向日葵　「あなたたち。今までもこれからも、ずっとたのしく暮らしていけばいい……向日葵になったあの人と、あなたと。ひまわり畑以外何もない星の上、二人きりで。」

向日葵、ゴミ箱の中から丸めた日記の紙を取り出す

向日葵　「６月２１日。夏至の日。晴れ後曇り。好きな人の自宅の庭に咲いていた向日葵を盗んだ。」

向日葵　「ボクはさ、生きてる人間よりも咲いてる花のほうがずっと好きなんだ。ごめんね……やっぱり無理だ。君の気持ちには応えられない。ボクが人間である以上、一緒に居たらいつかきっと、もっと君を傷つけてしまうから。」

女　「あなたが笑ってくれるなら、なんだってしてあげたかった。あなたがヒトとして生きることに苦しむのなら、いっそ、」

向日葵　「だから殺したの？」

女　「あっと言う間だった。気がついたら人間のあの人は、私の目の前で息絶えていて」

向日葵　「ねぇ、あなたが食べてるそれ、なに？」

女　「視線を感じて振り返ると、一輪の向日葵が恨めしげにじぃっとこちらを見ていた。」

向日葵　「なるほど。あの人の肉体を、自分の養分にしようとしてるのですね！」

世界に音が戻る
向日葵の花が１１本生けられた花瓶

女　「あなたが好きだった。とても。」

女は一人で向日葵の花を見つめている
血まみれの包丁、新聞紙、ハンバーグの皿

向日葵　「召し上がれ」

【７月７日】
女が電話をかけながら出かける支度をしている。楽しげな笑い声。

女　「……こんな時期に携帯水没させるとか、ほんと心配するからやめて下さいよ……」

女が鏡を見る。鏡の中に向日葵の花が映っている。

【了】